

大地の
D K
aichi no ioku
記憶



これ、4000年前の上八田の
人が食べたタイの骨

遺跡カラ未来へ

遺跡のセカイって ウツクシイ

約450年前

戦国期の寺院跡

「大願寺跡」で発見された石造
地蔵の基壇柱石。



約500年前

武田家の忠臣

武田二十面相の土屋高敏、折
手千人のほか有名な武田家忠
臣の土屋土屋敷が出土する。

約65年前

戦争の傷跡

白土コが焼く戦争。



約100年前

日本初の最先端取堤

築造された、当時の最先端技
術であるコンクリートを国内
で初めて本格的に使用した取
堤。

武蔵文化の発展

水を沼の水を活かす知恵と技術

近代技術の導入と戦争の影響

約400年前

ムツを守る堤防

海防使用目的ほか各所にムツ
を守る石積出しや竹垣など
の堤防が築かれ続ける。

約400年前

御崎蔵入遺跡

近藤川の氾濫が蔵むけ土砂に
覆われた入。



西暦2003年

南アルプス市誕生

工事によって埋没される遺跡の
公開保存を契機することにより、
南アルプス市の歩みが少しずつ
明らかになってきた。

今日

ドンナミライヲ
ツクリマスカ

NOW LOADING...

江戸前

源氏の活躍
源頼朝の居るから。

約700年前

鎌倉時代のムラ

大船車川を流す中で江戸川の尻尾
に大船の土製船が埋蔵された。

約300年前

水害と闘った村

洪水時津波には共助により村ご
と引っ越すこととなった町宮
村の集落跡。

鎌倉

室町・戦国

江戸

近・現代

世界に誇る

縄文文化の顔

IMOJIYA

鑄物師屋遺跡

イモジヤイセキ

縄

文人の心に触れる

約5000年前、縄文時代中期のムラ（集落のこと）の跡で、32軒もの竪穴住居の跡や、膨大な量の土器が発見されました。32軒は同じ時期に建てられたものではなく、常時4～5軒で、200～300年間ムラが存続した結果、32軒分の跡が残ったと考えられています。

国指定重要文化財

鑄物師屋縄文人のムラは、山から流れ出した土石流にのみ込まれたために、土砂に覆われたことで、発掘されるまでムラがそのままバックされており、完全形の土器が多く出土しました。また、そ



れらを観察すると縄文人の感性や精神文化を感じ取ることができる点で注目され、205点の出土品が国の重要文化財に指定されています。なかでも「円錐形土偶」、「人体文様付有孔鋳付土器」は、世界中の考古学ファンに知られる存在です。

円錐形土偶

高さ約25cmと大型の土偶で、円錐のような形のお腹は安定して自立します。乳房があり、さらに大きく膨らんだお腹には左手が添えられ、右手は腰をおさえています。妊婦さんがお腹の赤ちゃんをいたわっている様子が表現されているようです。家族やムラが繁栄するためにも、元氣な赤ちゃんと母親の健康を祈ったことでしょう。また、空洞のお腹にはもともと鳴子が入っ

ていて土鈴になっていたようで、この鳴子はお腹の中の赤ちゃんを表しているともいわれています。鑄物師屋縄文人の愛情が伝わってきます。

人体文様付有孔鋳付土器

樽のような形の土器の表面に鑄っているかのような姿が丁寧に描かれています。使用目的については、果実酒を造るための酒造容器とする説と、太鼓にしたという説に大きく分けられます。

一般的な土器には見られない文様ですし、この種の土器はあまり多くは出土しないことから、日常ではなく、祭り事などの特殊な用途のものであるとみられます。

鑄物師屋からのメッセージ



A



これら鑄物師屋遺跡の出土品は世界中や国内の数々の博物館で紹介されているだけでなく、様々な本の表紙を飾り、図鑑などにも多く登場しています。まさに日本縄文文化の「顔」といえます。

ほぼ完全な姿で出土した数少ない例であること、見ただけの芸術性、そしてなによりも鑄物師屋縄文人たちの「祈り」や「命」の大切さ、「愛情」などが感じられるところに世界中の方が強く惹かれているのです。鑄物師屋の縄文人たちが残してくれたメッセージは、現代の私たちこそが受け止めるべきものなのかもしれませんね。

華麗なる海外出張歴

- 平成7年 重要文化財に指定される
- 平成7年 イタリアローマ市立展示館へ
- 平成9年 マレーシア国立博物館へ
- 平成13年 イギリス大英博物館へ
- 平成14年 韓国国立中央博物館へ
- 平成18年 カナダ国立モントリオール博物館へ
- 平成21年 イギリス大英博物館へ

その他国内各地への貸し出しは数知れず。
※どれも半年程度の期間限定で貸し出していますので、
遠征はふるさと文化伝承館で展示されています。



土器の表面に土偶が貼り付いているもの。非常に小さく、しばしば「おまけ」の存在で知られる。その中には、土偶の顔が写りこんでいるものもある。

土偶は通常は破片として発見されるが、円錐形土偶は完全に近い状態で出土している。また、妊婦さんの姿を造って命の大切さを伝えているようにも感じられる。

時を隔て平安時代にムラカミ宮が宮まれ、住居跡162軒や大塚の集落土器も発見されている。古代「大井戸」の一部だったとみられる。

鏡が映す

古代の記憶

YAGOSHIMA NISHINOKI

野牛島・西ノ久保遺跡

ヤゴシマ・ニシノクボイセキ



連

綿と営まれる集落

御勅使川扇状地の頂上から扇端部に立地し、遺跡の北側には御勅使川が流れています。遺跡の周囲には大塚遺跡、野牛島・大塚遺跡、石橋北層敷遺跡があり、こうした遺跡に囲まれた本遺跡の推定範囲は約44,000㎡におよび、そのうち約25,000㎡の調査が行われました。

発掘調査によって、縄文時代晩期の遺物や古墳時代前期、奈良・平安時代～中世の集落跡が発見されました。

須恵器窯の存在

小さな谷底からゆがんだり、融着したりした須恵器の破片が大量に発見され、須恵

器の失敗作が廃棄された様子がうかがえます。このことから、奈良時代に谷地形を利用した登窯による須恵器生産が行われていたことが想定されます。このことを示すように大量の粘土を蓄えた建物跡も発見されています。

平安時代の鉄製品

平安時代に入ると遺跡内に集落が広く展開し、竪穴建物の中からは土器や刀子、鎌などのさまざまな鉄製の道具が見つかりました。そのひとつに産股鎌（かりまたぞく）と呼ばれる先が二股に分



かれた鉄製の矢じりがあります。狩りや履蹄馬に使われたもので、産股鎌が出土した住居は、武士が台頭してくる平安時代の終わりごろ、11世紀末～12世紀に使用されたものと推測されます。南アルプス市は甲斐源氏が拠った地域であり、武士との関わりを考える上でたいへん注目される遺物です。

貴重な発見が続々と

大量の木炭が出土した炭焼窯とみられる長方形の竪穴も発見されました。竪穴の壁と床の一部は真っ赤に焼けており、かなり高温で火が焚かれたことがうかがえます。

そのほか、平安時代最終末期の墓が2基、

KUBO

和鏡は語る

鏡は魔除けの役割を果たすとともに、女性の化粧道具であるため、埋葬されたのは女性かもしれません。鏡の文様は格子文の中にひとつひとつ「星梅鉢」を飾し、またスズメが2羽描かれています。県内でこの時期に墓から鏡が出土する例はきわめて少なく、鏡を副葬できるほどの有力者が野牛島周辺に存在したことを物語ります。

(直径8.2cm)



南北に並んで発見されました。北側の墓は土坑の周囲に石をめぐらし、その中に被葬者が埋葬されていました。頭の北側には副



葬品として置かれた青銅製の鏡が発見されています。南側の墓は、

北のものと同様同じ形状ですが、石を使わず、刀子（とうす）が口元に副葬されていました。どちらの被葬者も頭を北にし、体を西へ向かせ、足を折り曲げた姿勢で埋葬されたようです。

こうした数々の発掘成果によって、これまで知られていなかった先人たちの記憶が、地域の歴史に新たな1頁として書き加えられました。



空白地帯に
入れたメス

KOSAI BYPAS



低地部の遺跡群



低地部にメスが入る

中部横断自動車道・甲西バイパス（一般国道52号）建設計画に伴い行われた遺跡の発掘調査において「初めての発見」「最大規模」など一連のニュースが新聞の紙面に苦しめられた地域であり、遺跡など無いと思われてきたこの地域で、2000年以上も前から私たちの想像を越す大変豊かな暮らしが営まれていたことが判明したのです。

空白地帯が語った歴史

遺跡空白地帯といわれた市内の低地部を南北に貫く中部横断道・甲西バイパス（一般国道52号）の計画ルート内で、試掘調査によって17箇所もの遺跡が確認され、道路の建設によりそれらの遺跡は壊滅してしま

うことから、その前に記録物として保存するため、山梨県により発掘調査が行われました。

およそ10年にも及ぶ現地での発掘調査では、縄文時代の終末期から中世にかけて多くの人々が豊かに暮らしていたことが分かり、南アルプス市の歩みを知る貴重な成果を数多く得ることができました。

稲を求めて低地部へ

縄文遺跡では現在の地面の約4mも下に縄文晩期～弥生時代の遺跡が存在し、その上には厚く土砂が堆積していることが分かりました。

縄文時代の最終末、晩期と呼ばれる時代に人々は低地部へと営みの範囲を広げたようです。この生活エリアの拡大の理由は稲

作に適した水を求めての行動であったとみられ、滝沢川扇状地上にある向河原遺跡で弥生時代の水田跡が、隣接する油田遺跡では弥生時代の稲の脱穀などに使われる整片（たてぎね）などが発見されています。

爆発的な人口増加

南アルプスインターチェンジ付近にある村前東A遺跡では古墳時代初頭の東日本で有数の規模を誇るムラ跡が発見され、北陸や東海地方など様々な地域の特徴を持つ土器が混在し、北と南を結ぶ文化の交差点的な様相がみとめられます。ムラの規模からも、この時期に文化の流入とともに人口の流入があったと考えられます。

広大な牧場だった

SS



百々・上八田遺跡

百々
ドクドウ・ウエハツタイセキ H11・H12
馬が語る人と縁と水
南定約850mにわたって広がり、およそ250軒の住居跡がみつかりました。なかでも80体以上も見つかったウシやウマの骨は、中世の八田院との関連がありそうです。また、陶器や土師器、銅器の古もりなど後世特有な性格の強いものも出土しています。ムラは15世紀末まで続いた後に洪水により砂礫の下に埋没してしまいました。



十五所遺跡

十五所
ジウゴジョイセキ H6・H7
甲府盆地西部で最大の方形瓦溝集落群
弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのムラの跡で、お墓の形地帯ひとつである方形瓦溝集落とされる方形に区画された溝が16箇所見られました。最も大きい溝10号方形瓦溝集落は東の辺が約16mあり、中心部に溝体を築くための墓坑が張り込まれていました。



村前東A遺跡

十五所・十日市場
ムラマエヒガシエイセキ H2・H10
新しい土地、新しい時代を拓く
中心となるのは、今から約1700年～1600年頃の古墳時代前期のムラの跡です。141軒の第六住居跡が発見されました。東海地域に広範囲をもつ土師器の土器がたくさん出土したのは東日本でも珍しい、東海からの大規模な人やモノの動きがあったことを物語っています。卑弥迦における新しい時代の始まりを告げるムラといえます。



新居道下遺跡

十日市場
アライミダシエイセキ H3
御動物園(園状地帯)に拓かれた古代のムラ
発掘調査では古墳～平安時代の整った遺物群、平安時代の磨研具などが発見されています。園状地帯の溝水跡に交差していた時の溝かな生活環境を想像することができます。



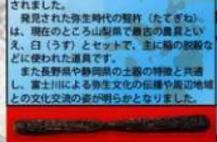
二本柳遺跡

十日市場
ニホンヤナギエイセキ H3・H4
戦国時代から江戸時代の寺院跡
加賀美遺跡の跡跡とされる法善寺の子孫の一つであった福寿院の跡で、遺跡からは16世紀を中心とした木棺蓋、井戸、竪立柱建物跡などの遺跡のほか、陶磁器、かわらけ、半地下、五輪塔なども見つかっています。木棺蓋の板などには梵字や真言密教の呪文(げんご)が書き込まれ、中世の葬送儀を知る上で全国的にも貴重なものです。また、戦国時代の発見の確立と推定される磨り金貨は、武田家所有と伝えられる現立の現立と非常に良く似ています。



油田遺跡

田島
アブラダイセキ H5・H6
弥生時代から平安時代にかけてのムラ
遺物・土器(陶器)などの地層も発見されました。発見された弥生時代の骨片(たてくま)は、現在のところ山梨県で最古の骨片といえ、白(うす)とセットで、主に豚の飼育などに使われた道具です。また長野や静岡県の土器の特徴と共通し、富士川による弥生文化の伝播や周辺地域との文化交流の痕跡が明らかとなりました。



向河原遺跡

江原
ムカイガワライセキ H4
弥生時代の水田跡
水田跡は、東谷と比ノ原間に小さく、縦で田間一帯の面積は最大でも約5m程度でした。当時の技術では広大な灌漑を整地するのが困難だったのです。わずかな地形の勾配にも苦労しながら、新築地を開墾していった弥生人の姿が垣間見えます。



大師東丹保遺跡

大師
ダイシヒガシタンボライセキ H5・H6
大量の木製品が発見された鎌倉時代のムラ跡
低湿地のため、遺跡では特ににくい水害品が大量に見られます。建物の柱や欄干に使用され、つり籠められた漆塗りの椀や盃、下駄、漆などの生活道具や、呪符(じゆん)のようなまじないの道具、陶磁器・金銀製品など、多種多様な遺物が発見されました。



宮沢中村遺跡

宮沢
ミザザナカムライセキ H6・H7
水害と闘った江戸時代のムラ跡
窪みに区画された寺町や民家跡、井戸、水堀等、江戸時代のムラの一部が発見され、井戸や下駄などの木製品がたくさん出土しています。江戸時代以降の重要な水害により、明治33～42年に村ごとが移転するまでの沼宮沢村の跡が、そのまま残っていたのです。さらに、下駄からは平安時代の水田跡も見つかりました。その跡を復元し、水田やムラを守り続けてきた人々の涙と喜びを写し出すことができます。



百々・上八田遺跡では平安時代を中心とした大集落が発見され、とくに、80個体を超す牛馬の骨が出土したことは、この地域一帯に広がる「八田院」の存在を裏付けることとなりました。

屈指の遺跡集中地帯

また、大師東丹保遺跡の中世の館跡や、宮沢中村遺跡の近世の集落跡などのように、これまで遺跡の空白地帯と思われていた地域が、空白どころか遺跡と人々の暮らしがまぎれ続けた、市内でも有数の遺跡集中地帯であることが判明したのです。

道路工事などは遺跡を破壊する原因であるとともに、裏面ですが記録として保存することで、地域の歴史に新たなページを加えるきっかけともなるのです。

ここで紹介する遺跡の出土品は、県の埋蔵文化財センターにより発掘調査がおこなわれたもので、その後県立考古博物館で収蔵され、その多くが展示されています。

土の器

POTTERY



4000年前の粘土
平岡の中畑遺跡からは、土器を作るために運び込んだとみられる粘土が、土坑の中に保管されたままの姿で発見されました。



縄文中期の土器 北原C遺跡
他地域との文化交流を示す土器の文様。



弥生後期の土器 住吉遺跡
菊川式など東海地方の文化を反映する。



古墳出現期の土器 十五所遺跡

土鍋のはじまり

縄文土器は主に調理のための鍋として作られましたが、お椀であったり、貯蔵容器として使われることもありました。調理具としての土器は弥生時代以降、炊飯を目的に熱効率の面で工夫に工夫を重ねてゆきます。



S字壺 寺部村附第6遺跡
口縁がS字状の断面形を持つ東海系の土器。



須恵器の壺 寺部村附第6遺跡
古墳中期の須恵器。黒内緑古鉄の須恵器で、大阪周辺で作られたとみられる。



古墳後期の土器 新居道下遺跡
カマドに対応して壺の胴部が長細化する。



コシキ 徳永・御崎遺跡
古墳後期の技術革新。蒸し器。



歪んだ須恵器 野牛島・西ノ久保遺跡
失敗作品の数々が窯の存在を証明する。



舶載陶磁器 大師東丹保遺跡
中世の青磁・白磁など。

土器にみる流通 1

縄文時代からすでに土器の文様からさまざまな地方との交流の様子はみとめられ、弥生時代には信州地方の文化と東海地方の文化が融合する位置に本市があることが読み取れます。



天目茶碗 住吉遺跡
瀬戸・美濃産の中世の製品。

土器づくりの発明

粘土で器を作り焼くことで水に触れても溶けない器を作る魔法の技術。この発明は縄文人たちの食生活を一変させ、私たち日本人の豊かな食文化が発達するのです。約15,000年前のことです。



縄文前期の丸底土器 中環遺跡
中環式と呼ばれる伊那地域特有の土器。

縄文中期の文化

縄文時代の中で最も華やかな文化といわれる縄文中期（約5000年前）。装飾は華美となり文様も独特な世界観が広がっています。南アルプス市にも日本を代表し、世界的に知られる中期の土器や土偶が出土しています。



縄文後期の土匙 徳永・御崎遺跡
影が動物のシルエットを彷彿させる。



弥生前期の土器 天神社遺跡
縄文晩期からの土器が出土する低地の遺跡。



高環 寺部村附第6遺跡
東海系の特徴を持つ土器。高環の環部分。

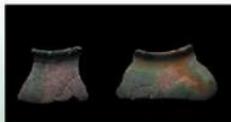
水煙把手土器 北原C遺跡
縄文中期後半の美しいラインが特徴の土器。八ヶ岳周辺地域特有の感性が光る。

土の器

生活スタイルにあわせ調理具としての器も姿を変えてゆきます。古墳時代にはカマドを使うようになり、適した形の鍋（糺）へと変化し、煮炊き以外に「蒸す」という調理法がポピュラーになっていったことがうかがえます。



古墳中期の高環 村内遺跡
柱状の脚部に時代性が表れている。



奈良三彩 立石下遺跡
奈良時代の三彩陶器で山梨で2例目。



灰釉陶器 溝呂木道上第5遺跡
愛知県豊田地方で焼かれた長頸甕。



墨書土器 跡物師屋遺跡



常滑焼の大甕 溝呂木第5遺跡
鎌倉時代は世紀後半に知多半島で焼かれた大甕。高さ59.2cmを誇り、煎印がみえる。



戦国時代の土器 石碓北屋敷遺跡
内耳鍋やかかわりけの甑々。

土器にみる流通2

古墳出現期には東海文化を示す土器の爆発的な増加などから人や文化の流入が認められ、また、古墳時代以降、特定の産地で焼かれた須恵器や、軸のかかった陶磁器類が流通します。



磁器 大師東丹保遺跡
近世の磁器類。江戸の墨吹が感じられる。

命

祈りとまつり 生と死

LIFE

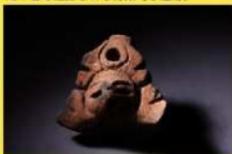
&

人々の祈りの心は様々なかたちとして現在に伝わっています。新しく誕生する命に、今を生きる命に、そして全うした命に。
祈りの形は時代とともに姿を変えるようです。



北原C遺跡のマジカルな世界

女神とみられる女性の顔や動物の姿をかたどった土器、また土偶などが多く出土したことで注目される特徴的な遺跡。



カエルとヘビ 北原C遺跡

天を向く4匹のカエルとカエルにのりとぐろを巻いたヘビが描かれているようにみえるとても珍しい把手。女性をあらわすカエルと男性をあらわすヘビといわれ、そのセットから、そこには命や命の誕生への思いが込められているとみられる。

命の象徴—土偶—

土偶のポーズには女性の姿や命を宿した母親をかたどったものが多いことから、繁栄や誕生、命を象徴しているとみられる。



石棒 中畑遺跡

縄文時代後期の石棒。男性のシンボルを模したつくりで生命への願いが込められている。



呪符木簡 大師東丹保遺跡

稲間道などでみられる五芒星を記した呪符木簡。生への願いが込められている。



土偶は通常ばらばらの破片の状態で出土することが多い。北原C遺跡では多くの土偶の破片や、動物を象った土偶が出土した。



長田口遺跡の土偶は5cmにも達しないが、動物師屋遺跡の内蔵形土偶と同じく上半身だけを表す。顔も手も省略した簡単なつくりだが、胸とおなかの表現は省略していないことから、女性や妊娠、命を象徴することに変わりは無いようだ。



動物師屋遺跡の内蔵形土偶は左肩だけが欠損しており、形を残す土偶といえる。おなかか新しい命を宿した姿を表現している。

OTHER WORLD



個人所蔵

秋山経筒 伝秋山経塚

秋山光朝の悲運を受け弟光経が一族の安寧を祈って埋納し、江戸時代に発見された。



低墳丘墳墓 中畑遺跡

墳丘は削平されており、発掘調査まで墳墓の存在は知られていなかった。古墳の中心から周囲溝の内側(あの世)と外側(この世)を結ぶ陸橋方向を向くとその延長上には富士山が見える。



和鏡 野牛島・西ノ久保遺跡

被葬者の愛用品か贈り物か。鏡面は丁寧に磨かれ、今なお輝きは色あせていない。



環郭墓 野牛島・西ノ久保遺跡

大きな鎌で囲まれ、西向き北柱で埋葬された被葬者の頭部付近に和鏡が埋納されていた。



勾玉 上ノ東古墳

漆川と市之瀬川とに挟まれた舌状台地上に存む古墳。5世紀代とみられるが詳細不明。



管玉と白玉 物見塚古墳

釜無川右岸で最大級の古墳で現存する唯一の前方後円墳。ヤマト政権との関わりを示す。確認調査によって被葬者の首飾りとみられる玉類の副葬品が多数発見されている。



木棺 二本柳遺跡

戦国期の木棺で、梵字が書かれるなど寺院関係者が葬られていたものとみられる。



方形周溝墓 十五所遺跡

弥生時代末の方形周溝墓群とみられる。写真は主体部に土層施設が発見された例。



市内最古級の須恵器 寺部村附第6遺跡

臨状輪建設に伴う調査で低墳丘墳墓が3基発見され、周溝から県内最古級の須恵器が発見された。樽形ハンコは県内でも極めて少ない出土例。



市内最古級の古墳 大師東丹保遺跡

水田地帯に4世紀代とみられる古墳が発見された。



屈葬 野牛島・西ノ久保遺跡

戦国時代の墓坑。その多くは西向き北柱で埋葬され、当時の仏教思想がうかがわれる。



行き交う

CROSS

甲斐の国は「交いの国」
南アルプス市は今も昔も文化の交差点

富士川が繋ぎ南北の文化が交流するまち南アルプス市。
歴史は古く、旧石器時代の黒曜石や縄文時代前期の土器の分布から、縄文時代以降様々な文化が行き交う様子や遺跡から出土する資料が語ってくれる。弥生時代以降になると人口の流入とともに地えす文化が往来し、やがては郵便往還として江戸の藩政時、絹の流通の拠点を経て、現在へと至る。地えす人と文化が交流するまちだったことがうかがわれる。

縄文時代の石器の材料として欠かせない黒曜石は山梨県内では採掘できず、市内出土の多くは長野県の諏訪周辺のものが多いです。また、市内で出土する**黒曜石の石核**（長田口遺跡）は山梨県内の遺跡の中では大型といえ、自家消費だけでなく海辺の地域とを繋ぐ中継的な役割があったとみられます。

さらに海辺との交流を示すとても小さな大発見。縄文時代では県内唯一の海産魚の骨が発見されています。約4000年前の1cmにも満たない**タイの椎骨**（西谷・上八田遺跡）で、海辺のムラとの交流を示すばかりか、魚を干物や塩漬けなどに加工する技術があったことを教えてくれます。

また、東海地方の文化を示す**土器群**（住吉遺跡）や**5字状口縁何台付埴**（寺部村南第6遺跡）、**環内でも出土例の少ない高環の器**（寺部村南第6遺跡）などから、古墳出現期には東海地方からの大規模な人やモノの動きがみられます。

奈良時代には海辺で粗く作られた塩を持ち込み、市内で精製していたことを示す**製塩土器**（向第1遺跡）の土器片も見つかり、富士川を通じてさまざまな文化の流入があったことが分かります。



乗り越える

OVERCOME

埋もれさせてはいけない 大地の記憶
先人たちは幾たびの困難をも乗り越えてきた
克服するDNAが南アルプス市の未来をつくる



土石流に覆われる — 徳物師屋遺跡 —

市之瀬台地の下、扇状地に立地する鎗物師屋遺跡の縄文集落は度重なる土石流により消滅しますが、居住の拠点を移しながら縄文時代の集落は営まれ続けました。土砂が建物跡を覆ったことで、後世の耕作などで遺跡が壊れることなく、土器が丸々完全形で出土しました。災害の最初の記憶といえます。

開拓者たちの土器 — 天神社遺跡 —

縄文時代晩期になると、新たな魅力といえる水田の適地を求めて、河川の氾濫というリスクを負いながらも果敢に新天地である低地部を開拓してゆきます。低地部の広い範囲で縄文晩期〜弥生時代の土器が出土し、その積極的な開拓ぶりがうかがわれます。

土砂に覆われる住居跡 — 西谷・八田遺跡 —

平安時代の整穴住居の内部に大量の土砂が溜まっている様子が多くみられ、度重なる洪水にも負けず土砂で埋もれては掘り直し、洪水を乗り越え暮らし続けてきた様子がうかがえます。また、牛馬の首を挿けた筒状の雫乳が行われていたとみられ、洪水と草履という相反する自然の猛威に立ち向かう様子もうかがえるのです。

最先端技術に挑む — 西安遺塚 —

大正5年〜15年に内務省直轄工事として、当時の最先端技術であるコンクリートを本格的に使用した国内初の砂防埋戻(えんてい)が御勸使川の土流に築かれました。

取水 — 御勸使川堤防跡群 石積出し4番埋 —

石積み堤防の基礎を保護するための「根固め」に使われた松材。松材同士は鉄製のボルトで固定され、御勸使川の激流に備えました。大正時代とみられます。

呪行木簡 — 大跡東丹後遺跡 (大跡) —

祭祀やまじない、魔除けの呪符として使われる五芒星

を記した木簡などが出土しました。陸奥道にも通じ、この地に暮らした古代・中世の人々の願いが込められています。





大 樹の記憶

遺跡から未来へ

平成22年度埋蔵文化財保存活用整備補助事業

発行日 2011年3月30日

編集・発行 南アルプス市教育委員会

〒400-0492

山梨県南アルプス市鮎沢1212

電話 055-282-7269

印刷

(株) サンニチ印刷